2019年4月２４日

基礎演習　A班

『ポピュリズムとは何か』授業用レジュメ

目的：本レジュメは、水島治郎著の『ポピュリズムとは何か−民主主義の敵か、改革の希望か』（中公新書、2016年）の、はじめにと第１章、第2章の概要を示し、その内容を分析する上での大まかな指針を与えることを目的とする。

「はじめに」に見られる点検読書の３つの問いへの答え：

1. どんな種類の本か。  
   ポピュリズムについて述べた教養書であり、ポピュリズムの躍進をどう考え、審査すればいいのかという価値判断を下し（民主主義の敵か希望かの判別）、ポピュリズムとデモクラシーの関係性を分析してその調和の可能性を模索する。この点において本書は実践書だと言える。
2. 全体として何を言っているのか。  
   ポピュリズムとはデモクラシーから切り離せない政治現象であり、デモクラシーの内部にある矛盾を映し出している。
3. そのために著者はどんな構成で概念や知識を展開している？
   1. 第１章でポピュリズムを理論的に位置付けている。
   2. 世界各地でのポピュリズム運動の具体的な興隆を見て、ポピュリズムが成立する背景や政治的影響、各地での特徴を検証する。
   3. b と並行してポピュリズムの多面性と功罪を解明する。
   4. 民主主義のうちにある矛盾が引き起こす政治現象としてポピュリズムを解き明かし、現代民主主義に差し迫る問題として考察する。

→「はじめに」の中の一文、「ポピュリズムなきデモクラシーはありえないのだろうか。」（水島治郎、『ポピュリズムとは何か』ivページからの抜粋）が議論の目的の方向性を示唆しており、本書の実践書としての性格を露わにしている。

第１章：ポピュリズムの理論的位置付け

* ポピュリズムの定義：「人民」の立場から既成政治やエリートを批判する政治運動。全ての既成政治やエリート層を「上」とみなし、その「下」にある一般大衆を代表して、その主張の実現を目指す運動とされる。
* ポピュリズムの特徴：

1. 「人民」重視

2. エリート批判

* + タブー破り（移民糾弾など、体制に抑圧された言動を取る）
  + 既存の民主主義的政治・行政機構が人民の意志を阻害する。

3. カリスマ的リーダー

* 制約なき「民衆の声」を代表。

4. イデオロギーの薄さ

* 具体的政策、思想を持たない。
* 「上」に対する反抗的姿勢が唯一の一貫性。
* ポピュリズムの矛盾 –人民代表を標榜するポピュリズムは民主的か？ -
  + 民主主義のポピュリズム的解釈では、統治者と被統治者の一致が掲げられ、同質性を持ったある一つの「人民」の意思を政治に反映させることを最重要視するため、抑制と均衡といった立憲主義の原則（民主主義の立憲主義的解釈）を軽視し、権力の集中と弱者や少数者の権利無視をもたらす→ ２つの民主主義の解釈による摩擦が生じている。
* ポピュリズムと民主主義の関係
  + 実務型デモクラシー（規則や制度設定、日常のルーティン的政治行政による紛争解決）と救済型デモクラシー（「よりよき世界」のため、制度や規則を超えて人民が参加する形態のデモクラシー）。実務型の民主主義の正当性は最低でも部分的にはその救済的要素（より民主を重視した立場）に由来するが、その救済的要素が無視されてしまうと人民が疎外感を感じてポピュリズムへ向かう。
  + ポピュリズムのデモクラシーへの寄与と阻害
    - 寄与
      * 周縁的集団の政治参加
      * 新たな社会的・政治的まとまりの形成
      * 重要課題を政治の管轄に呼び戻すことによる政治の復権→ 人々の参加と包摂を促進し、「デモクラシーを民主化」させる
    - 阻害
      * 立憲主義の原則軽視、多数決の過度な重視による少数者の権利侵害。
      * 「そともの」との対立や紛争の急進化
      * 国家の非政治的機関の権限制限。
    - ポピュリズムへの対処法
      * 「孤立化」、「非正統化」→ ポピュリズムの既成政治批判のナラティブを裏付けかねない。
      * 「適応・抱き込み」、「社会化」→ デモクラシー自体への信認が確立している必要がある。

⇨ ポピュリズムを批判し、排除するのは逆にその反体制の主張に説得力を持たせてしまう。しかし、取り入れることも慎重でなければいけない。ポピュリズム政党がデモクラシーを脅かさないようにするためには、デモクラシー自体への信認が確立していることが必要だからである。

第2章：アメリカ大陸、特にラテンアメリカに着目し、「解放」のポピュリズムの展開を明らかにする

ポピュリズムの展開：

* アメリカの人民党が最初。モノポリー、労働環境の悪化、貧困の拡大の状況を二大政党が無視したため、人民を代表して立ち上がった。
* ラテンアメリカのポピュリズムの５つの特徴
  + 交通、コミュニケーションの活用による民衆への直接的働きかけ（周縁部を取り込む）
  + 階級間連合による既成の分画を超えた運動
  + 輸入代替工業化と保護主義により国内工業の発達（品質、価格における国際的競争力養成を軽視）
  + ナショナリズム
  + 包摂性、選挙権拡大等により新たな有権者を支持者に変えた
* アルゼンチンでのポピュリズム
  + 急進市民同盟の台頭→軍事政権→保守政権
  + 軍事政権（ペロンが国家労働局長、労働者のための改革を進める）
  + 民政移管、ペロン大統領。
    - 労働福祉政策 – 賃上げ、労働者保護の社会立法、労組の強化。
    - 計画経済に基づく輸入代替工業化− 五カ年計画で中央政府の権限強化。国内工業育成強化。↔︎ 経営の効率性が軽視、財政赤字拡大。農業、牧畜業を圧迫。
    - 外国資本排除−インフラや基幹産業を国有化。↔︎ 国外投資の激減。公共サービスの経営効率性の低下。
    - エビータ、ポピュリズムの大衆性と持続性、そこからくる包摂性を象徴。
    - 「尊厳ある生活」で消費拡大。人民を消費者として包摂、尊厳ある生活を守るべく政治参加させた。
    - 経済停滞、独善性の強化、バチカンとのエバ聖人化めぐる対立… 権力減衰　ポピュリズムから権威主義へ。
* 今もラテンアメリカはその経済規模の割には格差が激しく、アンダークラスが大きい存在。アンダークラスなどのインフォーマルセクターの人は従来型の政党や社会団体では代表されにくいため、ポピュリズムの直接的訴えに応じやすい。ポピュリズムの土壌が整っている。

重要用語

ポピュリズム：政治改革を目指す勢力が、既成の権力構造やエリート層（および社会の支配的な価値観）を批判し、「人民」に訴えてその主張の実現を目指す運動とされる。（本書７ぺージより抜粋）

人民：　３要素から構成される。

1. 普通の人々（特権層と対置される）。ポピュリズム政党はこのようなサイレントマジョリティーの不満や要望を代弁（トランプの“誠実性”、Anti PC）。「健全な人間理解」＞「エリートの腐敗した発想」が定式化、それを政治に反映するのがポピュリズム政党。
2. 「一体となった人民」。個別の利益を追求する既成政治や政党に対し、一つの統合的な人民の全体利益を追うことを標榜する。民意の画一化↔︎ 民意は多様であるとする多元主義。
3. 「われわれ人民」。同質的特徴を共有する集団を人民とし、他者との区別で定義する。共通の敵となる「よそ者」を対置、統一を煽る。

民主主義の解釈：

1. 立憲主義的解釈：法の支配、個人の自由の尊重、議会制による権力抑制を重視する「自由主義」的な立場。≒実務型デモクラシー（規則や制度設定、日常のルーティン的政治行政による紛争解決）。
2. ポピュリズム的解釈：人民の意思の実現を重視し、統治者と被治者の一致、直接民主主義の導入など民主主義の要素を重要視。≒救済型デモクラシー（「よりよき世界」のため、制度や規則を超えて人民が直接参加する形態のデモクラシー）。